

(1) ヒアリング記録シート（市政参加経験のある方）

ヒアリング日時	平成30年10月11日（木）11時～12時30分
ヒアリング実施者	<市民参加推進フォーラム委員> 壬生裕子副座長 <事務局> 松岡みさき

<聞き取り内容>

市民公募委員になろうと思ったきっかけ

人の暮らしに元々関心を持っており、現在は文化人類学を研究している。

昨年度、京都府の事業の学習支援ボランティアの募集を学内で偶然見て、ボランティアとして活動した。その活動場所の施設で、チラシ配架ラックに市民公募委員募集チラシを見つけた。

自身の関心と合致したのと、学問の分野だけでなく、人の暮らしの中で、研究を活かして自分に何ができるのかと考えた結果、公募委員に応募した。

市民委員への応募は今回が初めて。ただ、中学生、高校生頃からボランティア活動をしていた。そのとき、自分ができる範囲で何ができるのか、社会に参画できるのかを考えて活動に参加していた。

市民公募委員になってみて

「自分ができる範囲で社会に参画したい」という視点で市民委員に応募しているので、応募する際に、不安に思ったことや分かりにくい点といったことは意識しなかった。

私自身も、市民委員に応募している他の同世代はどういう人なのか、どういう動機なのかは気になる。大学に通っていない社会人の方も含めて、どういう風に興味や関心をもって市政、まちづくりに参加しているのかに興味がある。

会議では、私は、せっかく参加したのだから発言しようと思っており、話しにくさなどはあまり感じない。

市民公募委員に応募しようとする市民の方は、応募する段階で既に市政に関心がある方だと思うので、積極的に発言をする方が多いとは思いますが、一方で気後れしてしまう人もいるかと思う。仮にそういう人がいるなら、市民公募委員が入っている場（会議）としてもったいない。

私自身、専門分野に関することは発言しやすいが、これが、「自分の専門ではないが何かできるのでは」と思って応募した人であればなかなか発言しにくいかもしれない。

事前に資料はもらうが、それ以外に、自分でそのトピックに関心を持って勉強しないと、発言するのにすこし気後れするのではと思ったりもする。

市政参加に対する意識

私は自分の今の興味関心と合致したのがこの懇話会だったので市民公募委員に応募したが、委員になってから、他の公募委員の案内にも目がいくようになった。

例えば、京都市や府に、どういう会議体があり、どういう人が参加していて、どういう目的でその会議が運営されているのかといったことも気になり、調べた。機会があれば、他の会議にも参加してみたいなと思っている。将来的には市民委員ではなく有識者として自分がその時にいる行政の会議に参画ができればという思いは、市民公募委員として市政に参加するようになって持つようになった。

審議会、公募委員に関して課題と感ずること。

予算をつけて運営している会議として、市民公募委員に応募したり、委員として内定した方が、委員になった後どういうモチベーションで会議に参画していくのかという点は課題であると感じる。もしかしたら市民委員側にも何か問題があるのかもしれないし、両者が共に考えていかないといけない課題だと思う。

また、会議は公開されているが、傍聴に来られる方はいない。議事録で確認するという方法もあるが、会議開催日、その場所だけの会議になってしまう。また、限られた時間の中で、議題すべてを解消できているかといわれると、十分にできていないかもしれない。

行政としてはコストカット等言われている中で、予算をつけて開催している会議なので、時間的なことを考えると今の形が限界なのかもしれないと思う一方、より良い方法がまだあるのではないかとも思う。こういう会議をどう活用していくのかという点では、府市に限らず、日本全国どの行政も持っている課題だと思う。

また、懇話会ごとの横のつながりとして、互いの問題点を共有できるような場があればいいのと思う。これまで日本全国色々な行政で行われてきていることが共有できれば、前例に学ぶこともできるだろうと思う。

他都市の先進的な事例については情報は分かるものの、そこに至った経過については十分に分からない。事例だけでなく、そこに至るまでにどういうプロセスを踏んでいるのかという点について、効果的に把握できるようになるとより良い方向に進むのではと思う。

人手、予算に限られる中、どう行うのかというのが一番の課題だと思う。

若者の市政参加の実情等について

友人・知人の市政への関心度は、それほど高くはないと思う。市政は自分が参画するものとは思っていないと感じる。

市民として自分が何をするのかというと、その行政区に暮らすし、関心のある問題に参画するということはあるかもしれないが、そもそも参加できる場（市民公募委員という制度や附属機関等という会議体）があるということを知らないし、どうやって参加するかも知らないのが現状だと思う。

公募委員の募集については個人的に「誰かに勧める」ということもあるかもしれないが、そういう情報がごく一般に目につく方が望ましいとは思っている。

若者の市政参加を進めるためのアイデア

現在、どの大学もポータルサイトを持っている。大学に市から何か情報提供があった場合、全大学のサイトに「京都市からこのような情報がとどきました」という形で掲載される。今は、シンポジウムやイベントの案内が普通にきたとしても、それが認知されていない。

逆に、大学に働きかければ、大学としてはそういった場所に学生がでていくことは歓迎しているわけなので、ポータルサイト（学内専用掲示板）に載せる。ここに情報を載せるか載せないかで、この世代の認知は大きく変わるはずである。公募委員の募集があれば、学内専用掲示板に掲載するだけで、大きく認知は変わると思う。そうした仕組みが、大学が多くあるわりには今現在ない。

市政の分野に関心のある学生は、参加する方法が分からないだけで、いないかといったらそうではないと思う。大学のポータルサイトは、行政側と、大学の橋渡しの一つのツールとして、使えると思う。

ポスターや、チラシといった古典的なツールも活用できる余地はある。こうしたツールは、対象となる人が、そうしたツールがあるということを知っているか知らないか、という点が大きいものではあるが、知っている人はそうしたものからも情報を拾っている。

また、大学のような機関に所属していない人に対しては、チラシラックであったり、ホームページであったりと、旧来通りの方法がいいのかもしれない。

<ヒアリング実施者の所感>

<壬生副座長>

市政参加の方法を周知するだけでなく、参加へのハードルを下げるための工夫も重要ではないか。

対象が多様な場合、さまざまな周知方法を組み合わせることが必要ではないか。口コミが効果的な場合もあれば、チラシやポスターがきっかけになる場合もある。

<松岡>

学生のように、なんらかの機関に属する人に対して市政の認知を向上させるには、大学のポータルサイトのように「全員が見る」という媒体での広報が効果的であることに気づけた。

(2) ヒアリング記録シート（市政参加経験のある方）

ヒアリング日時	平成30年10月15日（月）15時30分～17時
ヒアリング実施者	<市民参加推進フォーラム委員> 内田香奈副座長，菅谷幸弘委員 <事務局> 福田達也

<聞き取り内容>

市民公募委員になろうと思ったきっかけ

市民公募委員の活動としては、今の委員会ですべて委員になる前は、別の京都市の審議会で委員になった。任期は2年であり、学部4年生のときに委員になった。

ひと・まち交流館でチラシをもらい色々見るのが好きで、そこで公募委員の募集チラシを見て、それに興味を持った。

大学で自分が学んでいる専門領域であり、自分の研究は過去の事例だが、行政が実施している最先端のことについて聞けると思い、面白そうだと感じ、市民公募委員に申し込んだ。

自分の力を活かせるというよりは、行政が今何をしているのかを知りたかった。

現在の審議会の委員になったきっかけは、市役所からのお知らせにより公募委員の募集があることを知り、興味を持ったので申し込んだ。

応募の際の論文については、「市民公募委員になりたいな」と思い、「書こう」と思って書いたので、特にハードルではなかった。文章が書けなくて応募を諦める人もいるのかもしれないが、私の場合は普段から文章を書いていたからか、そうではなかった。

市民公募委員になってみて

最初、2年間の公募委員は、自分が大学・大学院で専門としてやっていることであり、何か現場で役立ててもらえるような発言できたらと思ったが、なかなかうまく意見をいうのは難しかった。年間4回の会議があり、委員の時には8回開催されたが、あっという間で、やっと慣れてきた頃に終わってしまった印象である。

会議は、1回ごとにテーマ設定があり、それに対して議論する形であるが、テーマ以外にも自由に議論できる機会もあった方が、それぞれの委員の意見を反映させることが出来ていいのではないかと思う。

今の審議会では、毎回会議の前に事前説明があり、丁寧に資料等を説明してもらい、理解を進めながら会議に出ている。普段、関心を持つことのない分野だったので、専門的なことも含め、興味深く参加している。

市政参加の手応え

公募委員になって、行政の仕組みを理解し、知らなかったことを知ることで勉強にもなっている。

自分の意見が議事録にも載り、行政の運営に何らかの反映がなされることは期待できる。しかしながら、年4回・1回2時間の会議だけでは単なる事実確認で終わってしまったり、会議の中でテーマを深めることが出来ないことも多く、直接的に手応えを得るのは難しい。

また、公募委員以外の場では、行政に意見を行ったり、相談しに行くというのは難しく感じる。

若者の市政参加等の実情について

自分の周りでは、それぞれで自分の興味のある活動を熱心にやっており、行政に参加しなくても、自分の活動で満足している、ということがある。まちづくりの活動であったり、ベンチャー企業へインターンに行ったり、社会貢献的な活動をしていたり、サークルに熱心に参加していたり、ということで、市政に興味を持ってもらうためには、それ以上に魅力のあるコンテンツを提供する必要があると考える。

また、「若い人に市政に参加してもらって、行政は何をしたいのか」という点が見えてこないのが問題だと思う。

市民公募委員でいうと、色々とハードルが高すぎると感じる。審議会の委員には、基本的に大学の先生、専門家が在籍され、行政の職員もその場にいる。「市民」というものが、普段から様々な活動を熱心に行っていたり、「意識の高い人」のみを対象としているように思ってしまう。若者の市政参加を進めるためには、さらに多様な若者が気軽に参加できる仕組みを整えて行く必要があると考える。

また、まちづくり活動についての若者の例でいえば、自分の地元では周りとのつながりが深すぎて面倒だと感じたりする反面、地元と適度な距離感がある場所では、まちづくり活動を支援したり、周りとうまく付き合いたいという気持ちがあったりすることもある。地域との繋がりが希薄化する中で、新たな地域との繋がり方が模索されていければと思う。

若者の市政参加を進めるためのアイデア

きっかけづくりとして、大学等のボランティアセンターと一緒に何かするなどもあるかもしれない。

自分の経験ではボランティア活動は、自分の居場所になったという点でメリットのあるものだったので、人のための活動とは思っておらず、自分の中では、ボランティアではないと思っている。そういう意味でいうと、市民公募委員も、「市民公募委員」と言わない方がいいのかもしれない。軽く、ふらっと行って、しゃべる、みたいなことが伝わる方が敷居は低いのかもしれない。

また、市政参加の制度上でハードルを下げるという点では、働く人が参加しやすいよう、平日夜や休日に審議会を開催することも必要ではないかと思う。

公募委員の募集の際に、初めての人にもわかりやすいチラシを作成することや、会議自体も説明を丁寧に行ったり、専門家でなくても発言しやすい雰囲気をつくるなど、工夫が必要であると思う。

<ヒアリング実施者の所感>

<内田副座長>

若者の市政参加の促進に当たっては、若者に参加してもらっても何をしてもらいたいのか、ということがはっきりしない、若者に伝わっていないということも問題かと感じた。若者も、他に沢山興味を引く活動がある中で、何を求められているか分からない場に行くのは難しいだろう。

<菅谷委員>

まちづくり活動の例でいえば、若者に運営をすべて任せる、といった方法で行うことにしたら、現在まで続けられたというものがある。子育て世代の方が運営しており、そのイベントが若者の地域に入る際の一つの入り口になっている。若者の参加には、大人側の器量が一定、求

められるものと感じる。

(3) ヒアリング記録シート（市政参加経験のある方）

ヒアリング日時	平成30年10月17日（水）10時～11時30分
ヒアリング実施者	<市民参加推進フォーラム委員> 大鳥井悠真委員，森川宏剛委員 <事務局> 松岡みさき

<聞き取り内容>

市民公募委員になろうと思ったきっかけ

所属するゼミの教授から，市民公募委員を募集していることを聴き，応募した。先生に声をかけてもらうまで，そうした制度があるとは知らなかった。尊敬する先生からのお話だったので，それならやってみようという思いと，新しいことに挑戦したいという思いから応募した。

政策的に興味がある分野だった。また，他府県出身であるので，観光都市である京都市の対応について知ることができれば，地元にも還元できることがあるのではないかと思った。

誰でも参加できる，という形ではなく，客観的なフィルターをかけて委員を選ぶ過程は必要だと感じており，公募委員に応募する際の論文作成は，自分にとってハードルではなかった。

自分が研究している専門分野ではないため，公募委員の応募を決めてから関連する社会問題について調べ，考えを深めた。

市民公募委員になってみて

どのような服装で参加すればよいのか，ということでもまず悩んだ。

当日資料が事前（2週間前）に送られてきたので，まずはその資料に目を通し，これまでの議論を確認した。その他はインターネットにより情報収集し，社説になっているような内容に目を通した。どういう点が問題視されているのかなど把握に努めた。

初めて会議に参加する際は，学内で見知った法学部の教授の方もいて多少入りやすくはあったものの，色々な世代，職業の方が委員として参加しているので，とても緊張した。

委員に就任して以降，これまで会議は1回開催されており，自分も1回参加した。元々，年に1回～2回の開催とは聞いており，そういう点では参加のハードルは低かった。

今回は，事務的な報告の時間が多かったため，発言機会は1度だった。的外れなことを言っているのではないかという不安があり，少し発言しにくい部分はあった。ただ，学生として審議会委員になったので発言したいと思っており，思ったことを発言することができた。次回会議ではもう少し発言したい。

市民公募委員になった手応え

市民公募委員の役割というのは，自分自身の立場から思うことを発言することだと考えている。京都に暮らす一大学生として，率直な意見を言うことを心掛けていた。この審議会に学生として参加していることが審議会にとって重要であると意識し，そういう，京都の大学生を代表して自身が選ばれているという構造も意識して発言しようと思う。

審議会の委員の活動は，会議の参加，発言であるので，もう少し他に何か活動できればという気はする。次回の会議の参加，発言に向けては，普段の生活の中で，会議に関連することに注意を払うようになった。

一方で、実際に自分が行政職員だったらという視点で考えると、このような審議会の在り方については気になる点もある。活動が活発になると負担は増えるし、かといってあまり活動しないのもどうかとなる。審議会で支払われる報酬のことを考えると、財源をフルに生かす形で活動できればよいのではと思う。

市民公募委員になって良かった点

良かった点は二つある。一つは、様々な年代、職業の方が集まって、一つの社会課題について議論するという点。普段同世代と話している中では出てこない、自分と違う視点からの意見が出るので、自分自身新たな価値観に気づかされた。

二つ目は、行政職員に興味があったので、学生のうちに審議会という取組に参加する経験が積めたことである。

他の学生に勧める際に注意すべき点としては、審議会委員になると会議で発言を求められるので、関心が無いテーマの審議会委員になっても発言するハードルが高く、積極的に発言するのは難しいと思う点である。興味のない審議会の委員になるのはお勧めできない。

若者の市政参加の実情について

社会課題を見つけて取り組もうとする方は、周りにそんなにいない気がする。

私は、活動するきっかけが重要ではなく、知って、やってみることが大事だと思っている。

実際にやってみて大変さが分かったり、新たに知ることがあったりと思うので、就職活動でのPRに利用するためにボランティア活動をするなど、活動する動機については色々あってよいと思う。

活動を始めた動機がどうあれ、市の活動に積極的に参加するうちに、それが市政参加の新しいきっかけになる可能性もあると思う。

市政参加を進めるためのアイデア

自由な時間があり、自由に選択できる大学生活の中で、大学側が様々な出会いの機会を作るというのは大事だと思う。ボランティアや審議会という場があるといったことを知れる場があれば、そうした場で知り、活動してみて初めて気づかされることがあると思う。自分は、審議会に参加してみて、市政に参加する制度や世の中の仕組みが少しずつ分かり始めている。

無作為抽出で人選し、本当の市民の代表に会議に委員として入ってもらえればよいのではないか。裁判員裁判のような形で、選ばれて初めて会議に入り、協議していくということである。普段は市政に関心が無いけれども、市民の一人として普段何を考えているのかということがそうした仕組みですくい取れれば、おもしろいのではないかと思う。

また、今後の地域振興を担うことを考えると、ずっと地元に住み、生活している人たちをどう巻き込むか、ということが大事であると思う。

若者の市政参加を促すのに、直感的に一番大事だと思うのは、報酬を出すことである。学生も時間を割いて参加する。市政参加は、将来的には自分の身になることだが、今の時点で気づける人は少ない。

限られた予算の中で難しい部分もあるかもしれないが、報酬に興味を持つ学生は多いと思う。就活にも有利だし、いい経験にもなるし、報酬ももらえるという形であれば、是が非でも参加したいという学生はいるのではと思う。友達に紹介しても皆それを知らないのが現状である。

<ヒアリング実施者の所感>

<大鳥井委員>

ゼミの教授など周りにいる大人の声掛けなしに、若者が自ら市政参加の機会を見つけることは難しいように感じた。

参加にあたっては、若者独自の不安があるので、なくしていくことが必要で、それが参加のハードルを下げることにもつながるかもしれない。

審議会など、開催頻度が少ない制度は手ごたえを感じづらくなるが、高くなると参加のハードルも高まるので、もう少し活動してみたいという気持ちが生まれたときにできることを考えていく必要があるのかもしれない。

<森川委員>

若者の市政参加のきっかけとしては、京都市政に近い場所にいる気の利いた大人が若者に声をかけないと、若者はそうした制度に気がつかないのかもしれない。そして、そうした大人とつながっている若者に、市政に参加するチャンスがあるのかもしれない。

社会人経験のない学生は、会議に出席する際の服装といったことから悩むので、そういう点についてケアしてもいいのかもしれない。

無作為抽出した方に審議会委員として入ってもらうというのは、方法的には難しいかもしれないが、きっかけをつくるという意味では面白いかもしれない。

(1) ヒアリング記録シート (グローバルセンター)

団体名等	特定非営利活動法人グローバル人材開発センター (以下「グローバルセンター」)
ヒアリング日時	平成30年10月9日(火) 15時~16時30分
ヒアリング実施者	<市民参加推進フォーラム委員> 杉山準座長, 金田喜弘委員, 佐々木達憲委員 <京都市職員> 山下比佐暢

<聞き取り内容>

グローバルセンターの概要
<p>グローバルセンターは、若者一人一人が自分の色を活かし、風通しの良い社会をつくるということを理念にしており、大学と経済団体と行政をつなげるハブ機能を担っている。</p> <p>学生のプロジェクト支援や、企業と学生との合同研修、留学生の就職マッチング支援など、学生と大人・企業をつなげる事業を主に行っている。</p> <p>関わっている若者は、主に大学生であり、一部の高校生とも関わっている。専門学校生とは関わっていない。グローバルセンターのプロジェクトに参加した大学生が社会人になっても参加している場合もある。また、期間限定のインターシップ生もいる。企業研修もしているので、企業の若手・中堅の方との関わりもある。</p> <p>スタッフは10名(女性6名, 男性4名)である。プロジェクトを進めているスタッフは4~5名である。1プロジェクト当たり5人~6人の学生がいて、スタッフ1人で30人ぐらいの学生を見ている。</p>
学生がグローバルセンターのプログラムに参加するきっかけ
<p>学生がプログラムに参加するきっかけは主に2パターンある。</p> <p>1パターン目は、何かしたいけど、何をしたらいいかわからないという学生が、たまたまグローバルセンターのことを知って参加する場合である。そういった学生は、グローバルセンターの職員が読んでいる本に興味を持って本を読みだしたり、ここは安心できる場だと感じて、何か動き出したりする。</p> <p>2パターン目は、グローバルセンターのプログラムを授業で受けた先輩から、面白いと聞いて参加する場合である。</p> <p>このほか、世界を平和にしたいなど熱い思いを持った学生も稀に来る。そういった学生は、サポートなしでも活動を始めることが多く、グローバルセンターは通過点という印象である。</p>
学生のモチベーション
<p>学生がグローバルセンターのプログラムに参加するモチベーションは、金銭的なことではなく、つながりたいという感覚だと思う。企業の社長とつながりたい、キャリアにつながりたいと言う学生もいるが、参加しているうちに、後輩や仲間に教えてあげたいといった気持ちになる。学生は、人に会いにここに来ているのだと思う。</p> <p>自分で何かできるという気持ちも大事である。例えば、グローバルセンターの職員が何かプロジェクトを進めたりしても、学生は「大人の立場だからできるんだろう」という気持ちにな</p>

る。ただ、同級生が活動を始めると、同年代の自分も「できるかも」と思い、活動を始める学生が増える。

また、モチベーションの維持としては、役割を任せること。そして悩んでいる時にちゃんと話を聞くことが大事。そうすると、プロジェクト終わっても、就職相談に来てくれたり、社会人になっても相談に来てくれたりする。

学生との関わり方

大人に相談したときに、意見を否定されると次から相談しにくいと言う若者もいるので、そうならないように気を配っている。若者は、何かやりたいて言った時に否定されるのではなく、受け入れられる経験が大事である。

1年を通じて関わり続ける学生は100人中2～3人。イベントに呼びかけて来てくれる学生が10～20人。思いはあるけど、うまく関われない予備軍が50人ぐらいである。

職員が、一人一人とどう向き合うかが、学生が残るかどうかに大きく影響している。

学生の行政に対する意識

自分が5年間、学生と関わった中では、行政職員になろうとしたのは、1人だった。

また、行政が自分達の言うことを聞いてくれる存在として、学生は認識していないので、行政を動かそうという発想がそもそもない。

学生が行政との関わりを増やすために

①市政参加やまちづくりは、とっつきにくいかもしれないけど、例えば、ポップで楽しくて、おしゃれなしつらえがあれば、参加する学生もいるかもしれない。更に、市政参加とは意識していないけど、いつの間にか、参加しているという形もある。例えば、餅つき大会と言っているけど、実は防災訓練になっているという例もある。

長野県の塩尻市では、職員だけでなく、市外からもいろんな人を呼んで、大学のゼミともコラボして、ポップな感じでイベントをしている。

行政と市民が協働して作る場がよいと思う。例えば、グローバルセンターと市民参加推進フォーラムで一緒に何かやるなど。

②今、京都市が「新しい文化政策」のアイデアコンテストを行っており、それを受けて、学生でアイデアを出そうと言うプロジェクトが進んでいる。学生は、市政参加だという意識はないが、気が付いたら市政に政策提言するという方向に向かっていた。このように、知らない間に、市政につながっていたということがいいと思う。

③社会に出る時は、みんな肩に力が入る。多くの若者が大企業志向で、他の選択肢を知らない。グローバルセンターでは、学生がありのままいれるように丁寧に支援をしている。その中で、コーディネーターと話して、企業や市政など、自分の興味の方向性が出てきて、その先に市政参加があるのだと思う。

京都市の取組で良いと思うところ

各区のまちづくりカフェは、今後進化していくと思う。ちゃんと聞いてもらえる、聞くことが大事だと思える貴重な場である。各区のまちづくりカフェについて、学生の参加者を増やすためには、学生が運営に関わるとよいと思う。学生がリーダーになって、部活みたいにすれば、学生ががんばって学生を集める。学生には活躍の場が必要である。

若者は場やコミュニティに関心を持つ前に、人への関心が最初にある。運営側と参加者で顔の見える関係をつくることが大事である。

<ヒアリング実施者の所感>

<杉山座長>

学生は人生経験が少ない中で、社会とのつながりを考えるのが難しいのは当然である。まずは、グローバルセンターなどの活動でもなんでも、参加してもらうことが大切で、その先に、企業、地域、行政のことに感じ、その延長上に市政参加があればよい。

市政への参加を我々が求めているように、地域の（中小）企業や地域の各種団体などは、若者を求めており、グローバルセンターはそのつなぎ手として実質的な活動をされていると感じた。特に印象的だったことは、若者は活動そのものの意義を理解し活動に参加しようと思うより、「人」（グローバルセンターのスタッフなど）に影響を受けて行動を起こすことがあるということで、その感覚は腑に落ちた。スタッフの体験やその人となりが若者に影響を与えたり、若者一人一人の「思い」や「彼らを動機づける本質的なところ」に丁寧に寄り添うことで、信頼関係が生まれ、それによって若者が動かされることは想像に難くない。若者にとって市政参加という行為や言葉はピンとこなくても、信頼できる先輩が勧めることならやってみようと思えるような、「関係づくり」は有効なのではないか。ひとくくりに「若者」として扱うのではなく「個」それぞれと向き合う（プロセス）の大切さを感じることができた。

<金田委員>

グローバルセンターは、学生がプロジェクトを体験する機会があって、そこで力を発揮できるよう、職員がきめ細かくサポートしていると感じた。

市政についても、すぐに参加できるものではなく、そこまでの道筋や、考える入口を丁寧に示していく必要があると感じた。そうした道筋をつくることのできるプログラムがあればよい。

<佐々木委員>

市政参加という言葉が自分ごとになりにくい。最近の学生は忙しいという話がある中で、グローバルセンターは、若者の心の整理や、若者が次のステップに行く役割を担っているのだと感じた。その先に、市政参加があればよいと思う。

<山下>

市政参加に興味がある若者を探すのは難しいが、気がついたら市政参加をしていたという仕掛けが出来ればよいと思う。

学生に丁寧に寄り添うことは、行政単独では難しいが、大事なことである。学生に市政に興味を持ってもらうためには、グローバルセンターなど、別の人の手を借りる必要があると感じた。

(2) ヒアリング記録シート (ユースサービス協会)

団体名等	公益財団法人京都市ユースサービス協会 (以下「ユースサービス協会」)
ヒアリング日時	平成30年10月29日(月) 14時~15時30分
ヒアリング実施者	<p><市民参加推進フォーラム委員> 佐々木達憲委員, ハッカライネン ニーナ委員</p> <p><京都市職員> 松岡みさき</p>
ユースサービス協会概要	<p>1988年(昭和63年)3月に, 青少年の自主的な活動の振興を図ることにより, 京都市の青少年の健全な育成に寄与することを目的に設立された。</p> <p>「ユースサービスの理念」は, 青少年が社会の担い手として成長するために, 社会参加と自主的な活動の機会を提供し, 必要な支援を行っていくことであり, ユースサービス協会はその理念に基づきながら, 京都市など関係行政機関, 青少年団体, 青少年の育成に関わる人たち, 青少年自身と協力しあいながら, 活動を展開している。(HPより抜粋)</p> <p><現在の事業の柱></p> <ul style="list-style-type: none"> ○青少年の自主的な活動促進のための事業の実施 ○青少年育成・支援のための調査研究 ○京都市青少年活動センターの受託運営(指定管理者) ○京都若者サポートステーションの受託運営 (厚生労働省及び京都市からの受託) ○子ども・若者育成支援地域協議会「指定支援機関」業務 (京都市からの委託)

<聞き取り内容>

京都市青少年活動センターの概要
<p>青少年活動センターのメインターゲットは中学生から30歳までの若者であり, そうした若者の自主活動をサポートする施設であるが, 施設そのものは年齢に限らず使ってもらえる。ユースサービス協会の事務局がある中京青少年活動センターには, 2階に就労支援窓口, 3階に引きこもり支援窓口があり, 日常的に色んな年代の方が利用している。</p> <p>「青年の家」という青少年活動センターの前身施設は, ユースサービス協会の設立よりも前に, 国の事業として始まった。戦後, 集団就職がされる場所に, 勤労青年たちの余暇施設として作られたものが「青年の家」である。2001年から青少年活動センターという名称に変えて, 当初の設置目的とは違う目的で運営してきている。</p>
若者が青少年活動センターに集まってくるきっかけ
<p>学校帰りの時間帯である16時以降, 若者が多くなる。</p> <p>友達に聞いて来る場合や, 親が知っていて親に勧められて来る場合, HPで「京都市自習室無料」で検索して来る場合などがある。中学生は日常の生活圏内にあるから来ている人がほとんどである。山科区は中学入学時にクリアファイルを配り, 全員に1回は知らせた, という形をとっている。高校生は自習利用が多い。大学生はサークルの活動場所になっているので, 活動場所として指定されて来ることがほとんどである。</p>

市内には若者が自習をする場がほとんどない。部屋貸し事業は、部屋に色んな機能（防音、運動できる広さ等）があるので、そうした機能を目的に来る子がいる。また、居場所事業などのプログラムに参加する子もいるし、単に漫画を読みに来ている子もいて、サークル単位ではなく、個人で利用している子も多い。

利用される若者は、日常生活の延長線上で来る子もいるし、悩みを抱えて来る子もいるし、自習をしにだけ来るという子もいるし、様々である。

ユースサービス協会が実施する事業の広報方法（若者の集め方）

事業系なら市民しんぶんや民間の新聞などに載せてもらい、チラシを作成して広報している。学校や図書館にチラシを置かせてもらったり、協会のHPやSNSでの広報など、一般的な広報方法と違いはない。メールは若者は見ないので使わない。センターによってはラインを持っている。青少年活動センターで直接会った若者に、チラシを見せながら参加を募る形が多い。

高校生よりも、大学生の方が忙しい印象。ただ、やりたい子は忙しくても「やりたい」からなんとか時間を調整してきている。

若者にとって関心の高いテーマであれば、広報方法は他の事業と変わらなくても、問い合わせは多い（例「子どもの貧困」に関してのボランティア）。

若者との関わり方

若者と関係性を作ることを大事にしている。誰々さんに会いにきた、話しにきた、というような、日常の中での関係性である。職員と若者の、日常的な関わりの中での話が、一步踏み込んだ相談や、チャレンジしたいといった相談につながったりする。「若者の成長を支える」という視点で活動するユースワーカーがいることが、ユースサービス協会の強みだと思う。

達成感、承認が大事。達成感は、市政分野に限らずちょっとでも自分たちのやったことが反映されたりすると得られるし、手応え感の色んなところで積み重ねていくべき。承認は、若者が楽しんでやっていること、やりたいと思っていることについて「それいいね」と伝えてあげることである。何かしら熱い思いをもってやっているの、その思いに共感したり、その活動を承認してあげることで関係性をつくり、その思いにつながる形で新しいことを提案したりすることができると思っている。

若者の市政に対する意識

選挙のことなど、ユースワーカーが若者に尋ねれば若者から答えが返ってくるので、若者は市政に関して関心が無いわけではない。しかし、そうしたことを安心して話せる場がない、と口をそろえて言う。また、色々な審議会で若者の声を聞かれるが、反映された感がないと感じているようだ。

ユースカウンスル（後述）の準備会で集まっている若者との話し合いでは、まちの課題が沢山出てくるので、そういった点でも社会に対しての関心はあるのだと思う。

若者による協議会：ユースカウンスルの取組

現在、ユースカウンスルという若者による協議体作りに取り組んでいる。昨年12月に勉強会を行い、現在は準備会として活動している。若者同士、若者と大人が対話できる場を設けるにはどうすればよいのかという議論から、若者が集えるサロンもしくは、ネットワークが必要なのだろうというところから始まっている取組である。

ユースカウンスルに参加している若者の中で、よく挙がるのは、バスや観光の問題。高校生

からは、学校の中でしか出会いがないので、学校を超えた交流の場がほしいといった内容も挙がった。若者それぞれに、自分ごとになっている問題がまちの課題として挙がっている。市民としての若者から見る世界観で、問題提起をしてくれている。

ユースカウンスルが、意識高い系の人たちが集まる場にはならないようにしようということで枠組みをデザインしている。

北欧には公的にユースカウンスルがあり、小学生からそうした活動に参加して、20代になって政治家になるという人がたくさんいる。若者と、政治家との距離がすごく近い。社会の大きな仕組みとして変えていかなければならないのかもしれない。我々としては変えていきたい。

若者の市政参加を進めるためのアイデア

若者の市政参加を進めるための枠組みを、若者と一緒に考えるのが大事で、そういうことを考える場に、若者を集める努力が必要だと思う。

大学進学をきっかけに京都に来る子は多い。しかし、住民票を移しておらず、選挙にコミットすることもしないようだ。将来の市民を育てるという点で、そこが一番大きなターゲット層だと思うので、そうした学生に対して何らかの方法で迫るのがいいと思う。引っ越す場合には住民票も移す必要があること等を周知し、選挙での投票を呼びかけるというのは、市政参加のきっかけになり得ると思う。

<ヒアリング実施者の所感>

<佐々木委員>

ユースサービス協会に来る若者について、「職員の誰々さんに会いたいから」来る子達がいるという話が印象的であった。やはり若者にとって、敷居が高いと感じられる活動には参加がしにくく、自分ごとになっていく感覚が第一歩となることを感じる。

一方通行ではなく共に創り上げるものとなることが市政参加を進めるのではないかと思うし、ヒアリングで話題となったユースカウンスルあるいは市政参加を部活動と並ぶような位置付けとしていくことも一考の余地有りかもしれない。

ヒアリング記録シート（市政参加経験のない方）

市政参加の経験	なし（ゼミの先生の紹介で、ワークショップの運営側としての経験は有り）
ヒアリング日時	平成30年11月6日（火）14時～14時30分
ヒアリング実施者	<事務局> 山下比佐暢，松岡みさき

<聞き取り内容>

市政とのつながり
普段生活していて、特別に意識することはない。
市政情報、どこでどのような広報なら大学生の目に留まるか
バス車内の広告や、大学食堂近辺の掲示板等の広報物は目に留まる。
「市政参加」と聞いて思うこと
普通に生活していて、言いたいことが全くないわけではないが、声をあげてもそれが市政に反映されるとは思わない。例えば、バスの問題について、乗客が多くて困ると思っても、友人同士で「困ったね」と話して終わってしまう。「仕方ない」と思ってしまう、「市に言ってなんとかしてもらおう」とはならない。
市政参加を進めるためのアイデア
市からの呼びかけの際には、日時、場所の他に、具体的に何をするのかといった内容が事前に分かれば参加しやすい。また、大学の先生から強く呼びかけられると参加するかもしれない。 ただ、どちらも、「新しい知識が得られる」、「色んな人の意見が聞ける」、「珍しいゲストが来る」など、自分自身が興味のある内容でなければ参加しない。事前に、そうした「得られるもの」が分かれば、参加しようという意識は高まるかもしれない。 例えば、「参加者は大学生限定、他大学の方と知り合えるチャンスですよ」という案内があれば、私は参加しないが、それに興味をもって参加する子はいらるかもしれない。「ワークショップ」をします」だけだと、その内容がどんなものか分からないから参加しにくい。 1回の講義だと知識が定着しないと思うが、大学の授業で市政参加手法について説明するのが一番多くの人に知ってもらえる機会になると思う。

<地域主催のワークショップでの経験>

ワークショップ参加のきっかけ
所属するゼミの教授から、地域の人主催のワークショップの運営手伝いの話があり、「都合があう時は参加しよう」、「できるだけ参加しよう」と思っていたので参加して手伝った。
ワークショップに参加してみて
参加者は高齢者が多いという印象を受けたが、参加者の話を聴くのは楽しかった。 ワークショップの対象年齢が分かりにくい。「誰でも参加できます」と言うよりも、ある程度絞って「～～という方に参加して欲しい」と呼びかける方が、参加しやすいのではと感じた。
地域への関心は高まったか
手伝いに入った地域の名前が耳に入ると気にはなるが、「関心が高まった」とまでは言えない。

「ワークショップ」自体は、授業で体験していることもあって、私は身近な感じはある。

ワークショップ（グループヒアリング）

「行政を他人ごとにしておくのって、もったいなくない？」開催報告

1 目的

若者の現状、意識について、深く知ることにより、若者の市政参加を促すヒントを得る。

2 日時

平成30年11月14日（水）18時30分～20時30分

3 場所

職員会館かもがわ 3階 大多目的室

4 参加者

11名（京都市に在住、通勤、通学している13歳～30歳までの方）
（内訳：社会人2名、学生9名）

5 運営（10名）

- ・市民参加推進フォーラム委員
杉山座長，内田副座長，壬生副座長，池田委員，大鳥井委員
- ・総合企画局（市民協働推進担当）
市民協働課長 福田，市民協働企画係長 山下，松岡
- ・子ども若者はぐくみ局（育成推進課）
青少年育成係長 高橋，中田

6 内容

概要
開会挨拶，趣旨説明，自己紹介
京都市の取組説明
感想共有
市民公募委員疑似体験（約10分） 少人数のグループに分かれ，市政に係る事案に対して意見を出し合い，市政に対して意見を言うという行動を疑似体験する。 <ul style="list-style-type: none">・事案のメリットとデメリットの両方を出してもらう。・ドット投票。大切だと思う意見3つにシールを貼る。・発表。シールが多かった上位3つのみ。
グループヒアリング（約60分） 市政参加の意識について，ヒアリングを行う。 3つのチラシを切り口にアイデアを出してもらいながら意見を深める。 （青少年モニター募集，公募委員募集，ワークショップ広報のチラシ）
グループ発表
感想共有
クロージング

グループヒアリング結果（概要）について

1 市政参加経験の有無

主な意見
市政参加経験有：4人 「京都マラソンボランティアに参加したことがある」 「青少年活動センターで学習支援ボランティアをしている」（2人） 「市民公募委員に応募したことがある」（1人）
市政参加経験無：7人 「京都市が設けている様々な市政参加制度を知らなかった」 「学習支援ボランティアはしているが、それが京都市主催の事業なのか知らない、分からない」など

2 このワークショップ（グループヒアリング）に参加した理由

主な意見
・京都市の市政参加に興味があった（他都市在住）。 ・予定が空いていた。 ・知り合いに誘われた。 ・タイトルがよかった。

3 なぜ市政参加しないのか

主な意見
・市の施策は決定事項であり、反対ぐらいしか言うことがない。 ・住民票がある場所ではないのに、意見を言っているのか分からない。 ・市政に意見を言う意味が感じられない。本当に変わるのか疑問。 ・若者に本当に来てほしいと思っているのか分からない（伝わってこない）。 ・仕事で時間がない。 ・若者はお金がないので、興味がわかないところに出向く余裕がない。 ・自分の生活を回すことを優先している。

4 若者に市政参加を促すにはどうすればよいのか

主な意見
・若者が市政参加することによって得られるメリットがはっきり分かればいい。 ・一番有効なのはお金や物。交通費が出るだけでも嬉しく、参加しようと思う人はいる。 ・市のロゴ等が入った物品よりも、図書カード、商品券等使途が自由なものの方がうれしい。 ・人とのつながりが得られる点はメリットになる。 ・社会貢献になる、就職活動時に役立つなど広報でPRする。

5 行政の広報の仕方について

主な意見

- ・行政の SNS は、文字情報が多く写真が少なく、とっつきにくい印象である。
- ・市民に「伝えたい」という思いが伝わってこない。
- ・「京都市は SNS で何を見せたいのか」という方向性を統一させて運営した方がよい。
- ・「行政の SNS」にある堅苦しいイメージとのギャップを狙い、絵文字を多用したり、カラフルな画面で発信したりして、インパクトを残すことを第一に考えた方がいい。
- ・大学のポータルサイトやツイッターに載せるのは困難かもしれないが、多くの人の目に触れる機会にはなる。
- ・大学で直接、説明会などをすれば伝わりやすい。

5 チラシについて

主な意見

- ・キャッチフレーズは曖昧だと分からないが、逆にそれで興味を持つ人もいる。
- ・「一緒に〇〇しませんか」という呼びかけの文言があると、興味をひかれる。
- ・「何故そのイベントをするのか」ということを、若者にとってのメリットを前面に出す形で伝えた方が関心をもつ。
- ・パッと見て、「手にとろう」と思えるかどうかが大重要である。
- ・文字の量が多いものは、関心のある人しか見ない。若者向けにするのであれば、極力情報量を少なくした方がよい（興味をもてば、自分から検索して調べようとするから）。
- ・参加対象者が「青少年」など明確に分かると、「自分も行ってもいいのだ」という安心がわく。
- ・内容のイメージが浮かぶくらい、過去の様子や写真、過去参加者の声等を掲載すると分かりやすい。
- ・会場へのアクセス方法は地図と一緒に載せるなど、分かりやすい方がよい。
- ・申込方法は、メールアドレスを打ち込むよりも QR コードで読み取れる方が手軽である。

6 参加した感想

主な意見

- ・市政参加の仕組みが分かった。
- ・市政参加が身近に感じられるようになった。
- ・意見を出し合うことが楽しかった。